

保育者養成課程に在籍する大学生のアイデンティティ・ステイタスと保育職への認知の関連 —実習未経験の大学生に関する検討—

The Relationship between Ego-identity Status and Consciousness about Childcare of University Students in a Nursery Teacher-training Course — A Case Study without Experience of Practicing Childcare —

藤田 由起*

Yuki FUJITA

Abstract

This study examined how the “ego-identity status” of university students in a nursery teacher-training course was related to their understanding, professional aptitude, hope, and interest regarding childcare. Seventy-five participants, who did not have any experience of practicing childcare, answered the questionnaire about their identity and the above-mentioned topics. The data indicated the three following possibilities: (1) Most students without experience of practicing childcare were in “the middle of identity diffusion and moratorium status.” (2) Students with high ego-identity status had more confidence in understanding childcare, childcare professional aptitude, hope, and interest regarding childcare than students with low ego-identity. (3) The students’ recognition of childcare was related to their belief in a way of lives. In conclusion, in a nursery teacher-training course, students need to not only accomplish knowledge and experiences of childcare but also consider and understand themselves deeply. Consequently, they can continue working as nursery teachers and feel that their work is worthwhile after graduating from the university.

I. 問題と目的

青年期は、「心理的離乳」(Hollingworth、1928)という言葉で表されるように、これまで自身を守ってきた養育者から精神的に自立したいという意識が強くなる時期である。そして、Erikson (1959) は、このような自立に向かう青年期における発達課題として、「アイデンティティの確立」を挙げている。「アイデンティティの確立」とは、田島ら (2016) によると、種々の役割実験を通して自分を正しく理解し、「日本人としての自分」、「男性としての自分」、「兄としての自分」など、自分の中に存在する多くの側面を自我によって秩序づけ、統合することであり、「アイデンティティを確立することにより、青年は自分なりの考え方や価値観、生き方、人生観、人生目標をもち、自己の主体性、自立性、独自性を確立することができる」とされている。Marcia (1966) は、青年のアイデンティティ達成（確立）の程度について、「危機」の有無と「傾倒」の有無によって、4つのアイデンティティ・ステイタスに分類した。田島ら (2016) によると、「危機」とは「その人にとって意味のあるいくつかの可能性について迷い、決定しようと苦闘した（している）時期」であり、「傾倒」とは「自分自身の信念を明確に表現したり、それにもとづいて行動したりすること」である。これらの2つの基準の有無によって、「アイデンティティ達成」、「早期完了」、「モラトリウム」、「アイデンティティ拡散」の4つの地位に分類される（表1）。Marcia (1966) のアイデンティティ・ステイタスにも「モラトリウム」という分類があるが、Erikson (1959) は、一人前の社会人としての責任や義務が猶予された時期を「心理・社会的モラトリウム」と呼び、この時期に一人前になるための努力や修行を積み重ねることで、

*くらしき作陽大学 子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

少しずつアイデンティティを確立していくと述べている。そして、大学生や専門学校生の時期にこのような心理・社会的モラトリアムの期間として様々な試行錯誤を重ね、アイデンティティの確立に向かうことが期待される。すなわち、大学生や専門学校生の時期においては、アイデンティティ・ステイタスの4つの地位の中でも「アイデンティティ達成」もしくは「モラトリウム」に位置することが期待されやすいと考えられる。一方で下山（1992）は、日本人大学生においてはErikson（1959）が従来提唱してきた心理・社会的モラトリウムで想定される心理状態とは異なる心理状態を呈することが多いことを述べており、その具体例として「モラトリウム心理」（小此木、1977）や「スチューデント・アパシー」を挙げている。小此木（1977）によると、Erickson（1959）が提唱してきた心理・社会的モラトリウムには自立への渴望や自己探求などの特徴があるのに対して、日本の青年におけるモラトリウム心理には、それらとは異なる全能感やしらけ、遊び感覚などの特徴があるとされる。また、「スチューデント・アパシー」とは、「職業に関する決定の回避」と「学業からの退却」を主症状とするものであり（下山、1992）、狩野（2011）は、「特定の原因がないにもかかわらず勉学に対して選択的に無気力を示して、無感情化した大学生の状態」と表している。大学進学が青年の進路の選択肢として一般的になった現代においては、この期間に将来を見据えて努力したり、自分を見つめ直したりすることよりも、目先の欲求に目が向き、自身の能力や自分らしさ、その先の人生を見つめることに至らない若者も少なくないと考えられる。

このように、現代の若者のアイデンティティ確立には様々な課題があると考えられているが、専門職を養成する大学や専門学校に在籍する学生の場合、入学の前段階からある程度自身の進路や将来に関する展望を有して入学してきていると推察される。そして、保育者養成校においては、保育士資格や幼稚園教諭免許状取得に必要な科目を中心として履修し、「保育者」として働くことを前提としたカリキュラムに則って学習していくため、必然的に保育者としての自分の在り方や適性について見つめる機会を多く有していると考えられる。一方で、上述したような心理・社会的モラトリアムの問題を考慮すると、保育者養成校に入学すること自体が目的となり、入学という目的が達成された後の学業やその他の活動における試行錯誤、自己の見つめ直しが疎かになってしまう学生も存在すると推察される。実際に小藺江（2014）は、保育者養成の現場において、保育職に就くために維持し続ける必要がある専門分野への興味関心、意欲、態度を維持する努力を怠り、できるだけ楽をしたいという学生の本心が見えることも少なくないと述べており、前述した「モラトリウム心理」や「スチューデント・アパシー」の状態に近い学生が保育者養成課程においても少なからず存在すると考えられる。また、必ずしも保育者としての就職を希望して入学していない学生も一定数存在しており、そのような学生にとっては保育士資格等の取得を目指したカリキュラムに則って学習や経験を重ねることが、自身の適性や興味関心を見つめ、アイデンティティの確立や明確な将来展望を見出すことに繋がる場合もあれば、保育職としての就職を前提とした学習に興味を持てず、学業そのものや自身の見つめ直しを怠ってしまう場合もあると推察される。

さらに、厚生労働省（2020）は、保育士養成校で学んでいても、「実習で保育をすることに自信をもつことができなかったから」、「授業を通して保育は想像していた仕事とは違ったから」等の理由で一般就職を決めている学生が一定数いることを示している。西山ら（2004）も、保育職に就きたいという展望をもって入学した場合であっても、「自分は本当に保育者に向いているのか」、「保育職を選んでよかったのか」という思いが顕在化することも少なくないと述べている。西山ら（2007）は、これらの問いについて、「入学後、職業選択の幅が比較的広い一般大学生が多様な業界、職種、労働形態の中から『自分は何に向いているのか』『何になりたいのか』という模索の問いを立てることで様相が異なる」と述べている。このように、専門職の養成校に在籍する場合、ある程度自由度が高い中で様々な経験や学習を自身で選択して積み重ね、幅広い選択肢の中から自身の生き方を選択していくのではなく、従来有していた目標や希望に関する経験や学習を積み重ねる中で、自身の希望と現実とのギャップに対する葛藤を経験することになりやすいと考えられる。

また、西山ら（2007）は保育者養成校に通う学生について、同一性の感覚が保育職の理解や適性感

に正の影響を与え、保育職の適性感が保育職で得られる充実感や満足感の予期や興味関心等に寄与していると示唆している。このように、保育者としての適性感やこれからの仕事への希望を抱き、自信をもって保育者としてのキャリアを選択するためには、アイデンティティの確立は必要不可欠であると考えられる。

以上より、本研究においては、保育者養成課程に在籍する大学生のアイデンティティの様相と保育職に対する認知の関連について知見を得ることを目的とする。アイデンティティの様相については、アイデンティティ・ステイタスの考え方をを用いて、各学生がどの地位に属しているかを測り、アイデンティティ・ステイタスと保育職に対する認知の関連について調査する。これを通して、学生のアイデンティティ・ステイタスに基づいた支援の在り方を検討する。なお、本研究においては今後実習予定であるが、調査時には実習未経験である学生を対象とし、大学入学後、比較的早い段階におけるアイデンティティ確立やそれに向けた試行錯誤を支えるための視点について検討する。

表1 各アイデンティティ・ステイタスの分類（田島ら(2016)及び加藤(2016)を基に作成）

	アイデンティティ達成 (同一性達成)	早期完了（権威受容）	モラトリウム (積極的モラトリウム)	アイデンティティ拡散 (同一性拡散)
危機	あり	なし	最中	あり または なし
傾倒	あり	あり	あるが、漠然としている	なし
特徴	過去に危機を経験し、 現在はその危機を克服 して選択した対象に傾倒 している。	過去に危機を経験して いないが、親や社会の 承認する対象を受け 入れ、現在その対象に 傾倒している。	現在、危機の最中で あり、傾倒は漠然として はっきりしていない。 明確な自己投入の対象を 主体的に獲得しようと して、現在危機のさなか で積極的な努力を行って いる。	過去の危機の有無に かかわらず、現在、傾倒 していない。

II. 方法

1. 調査手続き

A大学の保育者養成課程に在学する大学2年生75名を対象とし、2022年9月に質問紙調査を実施した。統計解析には、IBM SPSS Statistics Version23を使用した。

2. 倫理的配慮

本調査の回答は任意であり、研究以外には利用されないこと、回答拒否で不利益を被ることは一切ないことを説明したうえで実施した。

3. 調査内容

(1) 同一性地位判定尺度

加藤（1983）の尺度を利用した。本尺度は、「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入の希求」の3因子で構成されている。各因子の得点の高低により、①同一性達成地位、②権威受容地位、③同一性達成－権威受容中間地位（A-F 中間地位）、④積極的モラトリウム地位、⑤同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位（D-M中間地位）、⑥同一性拡散地位の6つのアイデンティティ・ステイタスへの分類が可能である。具体的な分類の方法について、図1に示す。加藤（1983）に則り、「まったくその通りだ」から「全然そうではない」までの6件法で回答を求めた。

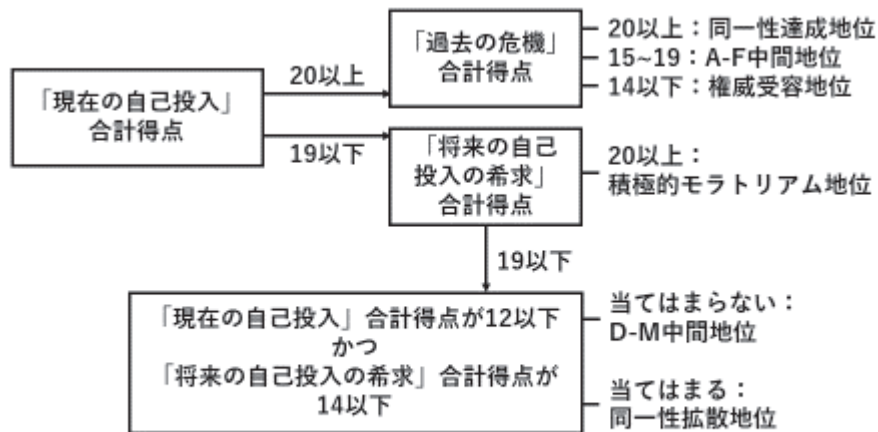


図1 各アイデンティティ・ステータスへの分類方法（加藤（1983）に基づき作成）

（2）保育職の理解

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業を、わたしは理解している」、「よき保育者になるために何をすればいいか理解している」の2項目を設定した。「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の7件法で回答を求めた。なお、以下に続く質問項目においても同様の7件法を用いた。

（3）保育職の適性感

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業は自分の適性に合っている」、「保育という職業で自分の能力を生かすことができる」の2項目を設定した。

（4）充実感・満足感の予期

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業で充実感を得るだろう」、「保育という職業で満足感を得るだろう」の2項目を設定した。

（5）関心・興味

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業に関心がある」、「保育という職業に興味がある」の2項目を設定した。

Ⅲ. 結果

1. 調査対象者のアイデンティティ・ステータスについて

調査対象者のアイデンティティ・ステータスについて、同一性地位判定尺度の得点を基に分類を行った。その結果、「同一性達成地位」3名、「同一性達成－権威受容中間地位」4名、「権威受容地位」4名、「積極的モラトリアム地位」2名、「同一性拡散－積極的モラトリアム地位」57名、「同一性拡散地位」5名と分類された。

2. アイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連について

1で分類したアイデンティティ・ステータスを独立変数、「保育職の理解」、「保育職の適性感」、「充実感・満足感の予期」、「関心・興味」の各合計得点をそれぞれ従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、全ての分析において有意差が見受けられた（それぞれ $F(5,69) = 3.87, p < .01$; $F(5,69) = 11.65, p < .001$; $F(5,69) = 5.50, p < .001$; $F(5,69) = 6.13, p < .001$ ）。

「保育職の理解」合計得点を従属変数とした場合、多重比較の結果、「同一性達成地位」群、「同一性達成－権威受容中間地位」群、「権威受容地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高い傾向が見受けられた（すべて $p < .10$ ）。

「保育職の適性感」合計得点を従属変数とした場合、「同一性達成地位」群、「同一性達成－権威受容中間地位」群、「権威受容地位」群が「同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位」群及び「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高かった（「同一性拡散地位」群との比較においてはすべて $p < .001$ 、「同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位」群との比較においてはそれぞれ $p < .001$ 、 $p < .05$ 、 $p < .01$ ）。

「充実感・満足感の予期」合計得点を従属変数とした場合、「同一性達成地位」群、「同一性達成－権威受容中間地位」群、「権威受容地位」群、「積極的モラトリウム地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高かった（「同一性達成地位」群及び「同一性達成－権威受容中間地位」群との比較の場合 $p < .01$ 、「権威受容地位」群及び「積極的モラトリウム地位」群との比較の場合 $p < .05$ ）。また、「同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位」群についても、「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高い傾向が見受けられた（ $p < .10$ ）。さらに、「同一性達成地位」群は、「同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位」群よりも有意に得点が高かった（ $p < .05$ ）。

最後に、「関心・興味」合計得点を従属変数とした場合、「同一性達成地位」群、「同一性達成－権威受容中間地位」群、「権威受容地位」群、「同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高かった（「権威受容地位」群との比較のみ $p < .001$ 、それ以外との比較の場合 $p < .01$ ）。各分析結果を表2に示す。

表2 各アイデンティティ・ステイタス群の「保育職の理解」合計得点及び分散分析結果

	同一性達成地位 (N=3)	同一性達成－ 権威受容中間地位 (N=4)	権威受容地位 (N=4)	積極的 モラトリウム地位 (N=2)	同一性拡散－ 積極的モラトリウム 中間地位 (N=57)	同一性拡散地位 (N=5)	F値
保育職の理解	11.67 (0.58)	11.50 (1.91)	11.50 (1.29)	10.50 (0.71)	9.56 (1.44)	8.60 (2.61)	3.87**
保育職の適性感	13.33 (0.58)	11.50 (2.52)	12.50 (1.29)	10.00 (0.00)	8.89 (1.57)	6.40 (2.70)	11.65***
充実感・満足感の予期	13.33 (1.15)	12.00 (2.16)	11.50 (1.91)	12.50 (2.12)	9.89 (1.84)	7.40 (3.13)	5.50***
関心・興味	14.00 (0.00)	13.50 (1.00)	14.00 (0.00)	11.00 (1.41)	11.46 (1.98)	8.00 (3.46)	6.13***

*** $p < .001$, ** $p < .01$.

()内は標準偏差.

IV. 考察

1. 調査対象者のアイデンティティ・ステイタスについて

本研究においては、6つのアイデンティティ・ステイタスに調査対象者を分類したが、青年期の望ましい到達点とされる「同一性達成地位」に分類されたのは、全75名中3名とわずかであった。上述したように、大学生の時期はアイデンティティを確立するための準備期間としての心理・社会的モラトリウムに当たると考えられることが多い。したがって、「同一性達成地位」に分類される対象者が少なかった本研究の結果は、むしろ自然な結果であるとも考えられる。一方で、「積極的モラトリウム地位」に分類された調査対象者についてもわずか2名であり、「アイデンティティの確立のために努力している」という自信が持てる学生がごく少数であると考えられた。そして、全75名中57名の学生が「同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位」群に分類されていたことから、自分自身の信念が現時点では曖昧であり、自身が持つ可能性について多様な視点で考えたり、可能性を見出すための努力を行ったりすることが本格的にはできていない段階の学生が多いと考えられた。

このような結果が示された背景には、様々な要因が存在すると推察される。まず、本研究における対象者は保育者養成課程に在籍する大学生であり、その思いの強さには個人差があるものの、多くの学生は保育者としての将来展望を有していると考えられる。すなわち、アイデンティティ形成の際の

軸として「保育者としての自分」や「保育者になりたい自分」の存在が強く、そのような軸に合わせた様々な自身の側面の理解やそのための試行錯誤が求められやすいと考えられる。本研究の対象者の大多数が「同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位」群に属していたことから、多数の対象者において「保育者としての自分」という軸のみが先行しており、自身の強みや適性などを含めた「自分らしさ」を見出すための試行錯誤が不十分な状態であると推察される。小泉・田爪（2005）は、保育者としてのアイデンティティの形成には実習経験が大きな影響を及ぼしており、実習の中で自身の保育者としてのモデル的他者を見つけ、モデリングすることを通して自身の保育者としての在り方や保育観を調整・形成していくことを示唆している。また、前田（2017）は、保育者への志望動機が高い学生は、実習前後で一貫して高い保育者としての効力感を有しており、さらに保育者への志望動機がもともと低かった学生においても、保育者としての効力感が実習を経て大幅に上昇することを示している。このように、保育者養成課程に在籍する学生にとって、実習経験は彼らのアイデンティティの軸となる「保育者としての自分」について考えるための大きな転換点であると考えられるが、本研究の対象者は実習未経験の学生であり、自身の保育者としての在り方や適性について考える機会をほとんど持つことができていないと推察される。そのような中で、「保育者としての自分」を中核とした自分らしさへの確証が持てなかったり揺らぎやすかったりする状態にいる学生が多い可能性が考えられた。したがって、保育者養成課程における、実習前の学生のアイデンティティ形成やそのための試行錯誤を支えるための手立てとして、ボランティアや子どもと関わるアルバイト等、実習以外で実体験を積みながら自身の適性や保育観について考える機会を設けること、自身の保育者として生きる上で不安な点や自身の短所をどのように補っていくかということを考えたり、自信を持つことができる点や長所を多く見出だしたりする作業に寄り添うことなどが考えられた。今井（2016）は、近年の保育者養成校の学生について、自分の視点を広げることが苦手であることや、他者と向き合い、自己主張する能力を培う経験に乏しいこと等を示唆している。このような現状を踏まえ、河内・小嶋（2013）や嶋野（2022）では、保育者を目指す大学生に対し、エゴグラムやリフレーミング、ロールレタリング等を用いて自己理解の深化を図る取り組みを展開し、効果を得ている。このように、保育に直接的に関連する知識を積むだけではなく、自分自身に関する理解を深めることも、「保育者としての自分」を含めたアイデンティティ形成全体に対して肯定的な影響を与えうると考えられる。実習に送り出す前の時期は、学生の保育の専門的知識をできるだけ高めた上で送り出したいという教員側の願いももちろん強いと考えられるが、実習より先の段階の、学生のキャリア選択やアイデンティティ形成を見据えた広い視点での指導・支援も学生の成長・発達に繋がる重要な要素であると示唆された。

また、前述したように小藺江（2014）は、保育者養成の現場において、できるだけ楽をしたいという学生の本心が見えることも少なくないと述べている。すなわち、本来であれば自己研鑽や様々な挑戦に充てられるべき心理・社会的モラトリアムの期間が形骸化している学生が多いと考えられる。したがって、学生に対して入学時から今後学ぶことの見通しを持たせ、「入学＝ゴール」とならないよう、適宜自身の取り組みについて振り返り、修正していく作業を促すことが必要だと考えられる。その際、振り返り・修正作業自体が惰性で行うような形だけのものとならないよう、上述したような自己そのものに対する理解と関連付けながら考える機会を設けられるとよりよいと考えられる。

2. アイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連について

次に、アイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連について考察していく。まず、分析結果全体を概観して、「同一性達成地位」群及び「権威受容地位」群、「同一性達成－権威受容中間地位」群の学生が全ての分析において「同一性拡散地位」群の学生よりも得点が有意に高い、もしくは有意に高い傾向があるという結果が得られた。得点が高かった3群に共通する特徴として、自分自身の信念を明確に持ち、それに基づいて行動する「傾倒」が見受けられる、もしくはそのような状態になる過程であるという側面が考えられる。したがって、保育職への肯定的な認知には、自身の信念の明確さが大きな影響を及ぼすと示唆される。自身の信念や考えは、他者の信念や考えを知り、自身に

について鑑みることでもまとめ上げられていくものであるが、上述した内容と同様に、他者の視点に思いをはせ、自分の視点を広げることが苦手な学生が近年の保育者養成課程には多く存在すると示唆されている（今井、2016）。また、村本（1989）は、「青年期のアイデンティティ確立期において、まず自分の身近にいる同年代の類似他者と自分を比較しその中で彼らと自分との相違を比較することによって、少しずつアイデンティティを確立していく」と示唆している。したがって、学生一人一人が自身の信念を明確に持ち、最終的なアイデンティティ確立へ繋げることができるようにするためには、所属や年齢、目標などの類似点を持つ他者、すなわち同じ保育者養成課程の学生間での意見や考えを交流する機会を多く持つことが大切だと考えられた。

なお、本研究においては「危機」を経験していない「権威受容地位」群が、「危機」の最中である「積極的モラトリアム地位」群と比較して全体的に保育職への認知が肯定的であるという結果が見受けられた。このことから、保育者養成課程に在籍する学生が、保育職への肯定的な認知を持って学び続けるためには、必ずしも「危機」の経験は必要な条件にならないと推察される。保育者養成課程に在籍する学生の中には、「親や親戚が保育者である」という者も一定数見受けられる。他にも、専門的資格を取得することを親や自分自身が望み、その中で保育という選択肢を選んで入学している者もいる。このように、専門職を養成する学部・学科に所属する場合、そうでない学部・学科に所属する場合よりも、他者の意向を受けて形成された目標や「資格取得」という目標が先行し、自身の生き方や自分らしさを探るための「危機」が存在しない場合があり、そのような目標が自身に違和感なく受け入れられていれば、保育者への肯定的な認知を持って保育について学ぶことができると示唆された。

また、Erikson（1959）は「青年期の発達課題は自我同一性の確立であり、その中心的な要素は職業決定である」と述べている。このことから、本研究で示された各対象者のアイデンティティ・ステイタスは、彼らの保育職という職業への確信が大きく反映されていると推察される。さらに、西山ら（2007）は、「同一性の感覚」を始発として「保育職の適性感」に繋がり、そこからさらに「充実感・満足感の予期」及び「関心・興味」に繋がるというように因果連鎖していくこと、反対に「同一性の感覚」が低い場合、保育職への適性感が低くなり、将来の職業生活に対して充実感や満足感を予期することも難しくなるため、結果として関心や興味も低くなるといった、悪循環を引き起こすことを示唆している。本研究においては、アイデンティティ・ステイタスの様相は「保育職の理解」、「保育職の適性感」、「充実感・満足感の予期」、「関心・興味」の全てに対して影響を及ぼしているとし唆されたが、特に「保育職の適性感」を従属変数とした分散分析において、最も高いF値を示していたことや、各アイデンティティ・ステイタス間の得点差が最も大きいことから、西山ら（2007）の研究で示されている結果と同様に、アイデンティティの在り方が直接的に保育職の適性感へ結びつきやすいことが伺える。これらのことを踏まえると、学生のアイデンティティ形成を促進すると共に、そこで自身の特性と保育職に必要な適性を照らし合わせて試行錯誤することを支えることが、保育職への肯定的認知や興味に寄与すると考えられる。なお、西山ら（2007）は「自己を多面的に評価し、肯定的な適性感を維持することが大切である」と述べる一方で、「保育職への適性感に疑問を持ち、ある程度の自我同一性の危機や混乱を経験することも必要」であること、「むしろそれに直面することで、保育職の現実を受け止め、現実社会での生活に向けた自我成長を遂げることが期待できる」ことを指摘している。したがって、自分の思う「自分らしさ」と保育職としての適性感の間の溝そのものが初めからできないようにするというよりも、そのような溝ができたとしても、それを埋める方法を見つけるために努力することが大切であると考えられる。このような溝ができた時点で、「自分に保育職は向いていない」と保育職を諦めてしまったり、保育職に就くことへの不安や心配を増大させつつ何もできない状態に陥ってしまったりする学生も少なからず存在すると考えられるため、保育職への適性として足りていない部分を補う方法や伸長させる方法がないか、反対に保育職への適性として誇れる・自信を持てる部分がないかについて考える作業を支えていくという視点は、保育者養成課程において必要な視点であると考えられた。

そして、本研究においてはアイデンティティ・ステイタスが低い次元であるほど、保育職への肯定

的な認知も持ちづらいことが示唆されたため、保育者養成課程の学生が卒業後に希望を持って保育者として継続的に勤務することができるようにするためには、自分自身の特性や信念について考える作業を就職活動の時点で始めるのではなく、入学後の早い段階から取り組めるような機会を設け、4年間かけて保育の知識や経験と結び付けていくことが大切であると考えられた。

3. 今後の課題

本研究においては、実習未経験の学生を対象として調査を実施したため、全体として対象者のアイデンティティ・ステイタスが低い次元に偏りやすかった可能性も推察される。その結果、群間の人数差が大きい、群によってはわずかな人数になってしまった等の分析上の懸念点が存在したことも否めない。したがって、今後は対象者の人数を増やしての分析を実施したり、実習経験後、就職活動後等、様々な段階における学生のアイデンティティ・ステイタスと保育職への認知の関連を検討したりすることで、より信頼できる結果が得られると共に、系統的な大学での指導・支援に役立てることができると考えられる。

また、本研究では各指標の関連構造について詳細には把握することができていないため、今後より各指標の具体的な関連の在り方について検討していくことが求められる。

V. 引用文献

- Erikson, E.H. (1959) Psychological Issues Identity and Life cycle . International Universities Press, Inc. 西平直・中島由恵訳 (2011) アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房. ; (小此木啓吾訳編 (1973) 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房.)
- Hollingsworth, L.S. (1928) The psychology of the adolescent. New York: D. Appleton Century Company.
- 今井和子 (2016) 主任保育士・副園長・リーダーに求められる役割と実践的スキル. ミネルヴァ書房.
- 狩野武道・津川律子 (2011) 大学生における無気力の分類とその特徴—スチューデント・アパシーと抑うつ—の視点から—. 教育心理学研究, 59, 168-178.
- 加藤厚 (1983) 大学生における同一性の諸相とその構造. 教育心理学研究, 31(4), 20-30.
- 河内晴美・小嶋玲子 (2013) 教員・保育者をめざす大学生の自他への肯定的対応の試み—SFAのリフレーミング技法を取り入れた指導—. 第55回日本教育心理学会発表論文集, 204.
- 小泉裕子・田爪宏二 (2005) 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究—保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連—. 鎌倉女子大学紀要, 12, 13-23.
- 厚生労働省 (2020) 保育士の現状と主な取組. (<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000661531.pdf>, 2022年9月30日閲覧).
- 前田有秀 (2017) 保育専攻生における保育実習経験の効果に関する研究—保育者効力感変化に影響を与える事前要因の検討—. 尚絅学院大学紀要, 73, 15-27.
- Marcia, J.E. (1966) Development and validation of ego-identity status. Journal of Personal and Social Psychology, 2, 551-558.
- 村本由紀子 (1989) アイデンティティ確立の発達段階の違いが社会的比較に及ぼす効果. 社会心理学研究, 4(1), 1-10.
- 西山修・田爪宏二・富田昌平・中川智之 (2004) 家庭からの巣立ち期における女性のアイデンティティ地位と職業意識との関係：保育者志望学生に対する予備的分析. 家庭教育研究, 9, 13-22.
- 西山修・富田昌平・田爪宏二 (2007) 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造. 発達心理学研究, 18(3), 196-205.
- 小此木圭吾 (1977) モラトリアム人間の時代. 中央公論社.
- 小藺江幸子 (2014) 保育実習が学生の自己効力感に与える影響—実習回数の違いによる自己効力感の

特徴－. 淑徳短期大学研究紀要, 53, 97-112.

嶋野珠生 (2022) 保育者養成における自己理解, 他者理解, 共感性向上を目指した授業「幼児理解」
2年間の実践に関する一考察. 富山短期大学紀要, 58, 94-107.

下山晴彦 (1992) 大学生のモラトリアムの下位分類の研究－アイデンティティの発達との関連で－.
教育心理学研究, 40(2), 1-9.

田島信元・岩立志津夫・長崎勤 (編) (2016) 新・発達心理学ハンドブック. 福村出版.

